

旅の絵

堀辰雄

【テキスト中に現れる記号について】

◀◁：ルビ

(例) 衣裳戸棚いしやうとだな

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 一冊一独乙語ドイッ

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)

(例) 「#ここから3字下げ」

〔〕：アクセント分解された欧文をかこむ

(例) 〔Die Freunde, die ich geku:sst und geliebt,〕

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照してください

http://aozora.gr.jp/accent_separation.html

……なんだかこたこたした苦しい夢を見たあとで、やっと目がさめた。目をさましながら、私は自分の寝ている見知らない部屋の中

を見まわした。見たこともないような大きな鏡ばかりの衣裳戸棚、剥げちよろの鏡台、じゆくじゆく音を立てているステイム、小さなナイト・テーブルの上に皺くちやになつて載っている私のふだん吸つたことのないカメラヤの袋（私はそれを何処の停車場で買ったのだか思い出せない）、それから枕もとに投げ出されている私の所有物でないハイネの薄っぺらな詩集、　　そう云うすべてのものが、ゆうべから私の身のまわりで、私にはすこしも構わずに、彼等の習慣どおりに生き続けているように見えた。今しがた見たことは確かに見たのだが、どうしても思い出せない変にごたごたした夢も、それまで自分はぐっすり眠っていたのだという感じを私に与えはしているものの、同時に、まるで他人の眠りを借りていたかのような気にも私をさせないことはなかった。……

私はベッドから起き上ると、窓を開けに行った。しかしその窓のそとはすぐ高い石囲いで、石囲いの向うには曇つた空と、隣りの庭のすつかり葉の落ちきつた裸の枝先が見えるきりだった。が、その窓を通して、しつきりなしに汽船のサイレンがはいつてきた。その聞きなれない異様な叫びは、自分がいま東京から離れている、目に見えない長距離を、一瞬間、私の目に浮び上らせそうにした。そういう喧騒の中からひよっくり生れてきかかった一種の旅愁に似たもの、　　私は再び窓を閉じた。……

そうすると今度は、私の背中合わせの部屋から、タイプライタアの何かにじゃれているような音が聞えてきた。が、それはだんだんいらいらしたような音に変わりながら、すぐ止んでしまった。私はゆうべこのホテルに着くなりすぐ目に入れたところの、廊下の隅にほうり出されていた、錆びかかったようなタイプライタアを思い出し

た。 それにしても、一体いまは何時ぐらいなのか少しも分らない。 まだ朝飯は食わしてくれなのかしらと思いつながら、私はポオイを呼ぶために、窓とは反対の側の、ドアを開けてみた。 食堂は私の部屋と隣り合わせになっているらしい。 そこからは途切れ途切れな話し声に雑まじってときどき皿にぶつかるとスプーンやナイフの音が聞えてくる。 …… しかしそれは誰かがまだ朝飯を食べているのか、それとももう昼飯を食べ出しているのか、わからない。 …… どうも具合がへんだから、私はドアを開け放しにしておいて、もう食堂からポオイが出て来そうなものと待ち伏せていた。

やっと食堂からポオイが姿を現わした。 支那人しなじんらしかった。 私は彼が日本語を解するのかどうかを知らなかった。 英語と日本語をまぜこぜにしながら、

「Breakfast まだ出来る？」と聞いた。

「どうぞ 」と言ってポオイは空皿うつらをもった手で食堂の入口を示したが、そのまま無愛想にコック場の方へ行ってしまった。

私はなんだか一人きりでそんな食堂の中へはいつて行くのが気づまりだったので、ポオイが再び皿を運んで来ながら私の部屋の前を通るのを待っていた。 丁度その廊下の映っている鏡に向ってネクタイを何度も結び直しながら、あたかもそれがために何時いつまでも愚図愚図しているかのように装って。

やっとのことで再び姿を現わしたポオイの跡にくつついて食堂の中へはいつてみると、食堂と云うのもほんの名ばかりであって、二つの部屋をぶち抜いて、そこに安っぽい花模様のあるクロオスを掛けた卓子テェブルが五つか六つ置いてあるきりだった。 中央の大きな卓子にはホテルの主人夫婦が珈琲コォファイを飲んでいた。 そうして向うの壁ぎわの

隅の小さな卓子には、青色のブラウスを着て、ブロンドの髪をした十八九の娘がひとり、それから中庭に面して一段低くなったヴェランダのようなところに卓子が二つ置いてあつたけれど、その一つには、黒っぽい着物を着たふたりの女　栗色の髪をして綺麗きれいに化粧した二十七八の若い女と老眼鏡をかけたその母親らしいのが差し向いで食事をしていた。そのもう一方の空いた卓子あが私にあてがわれたのである。食堂の時計を見ると十一時近くであつた。もうこんな時刻なのに、この食堂がこんな女達ばかりなのには私はちょっと異様な気がした。私が這入はいってゆくの認めると、珈琲を飲みかけていた主人が私の方へ顔を向けて微笑ほほえみかけながら「ゆうべはよく眠れたか？」と英語で訊きいた。それだけならいいが、それと同時に、他の女達が一ぺんに私の方をけげんそうにふり向いたので、私は少しどきまぎしながら、反射的に微笑を浮べたまま、主人にうなずいて見せた。やがてこんな stranger によつてちよつと中絶された会話をみんなは再び続け出したらしかつた。ときどきヤポンスキイという言葉が混じる。ひよつとすると俺おれのことでも話しているのかしらんと思ひながら、そんな空想によつてかすかな気づまりを感じながら、私は食堂の窓から、半ば寝ぼけた顔つきで中庭を眺めていた。が、それは中庭といつても、狭苦しくつて、樹木なんぞは一本も植つつていず、ただ空箱の上に一鉢ひとひしの菊が置かれてあるつきりだつた。しかもそれすら汚きたらしく枯れたまんまだつた。……

小さなトランクひとつ持たない風変りな旅行者の一種独特な旅愁。

私はさっぱり様子のわからない神戸駅に下りると、東京では見かけたことのない真っ白なタクシイを呼び止め、気軽に運賃をかけ

合い、そこからそうしつづけている者のように、元町通りの方へそれを走らせた。もっとも通行人を罵る運転手の聞きなれないアクセントは私をちよつとばかり気づまりにさせたが。……

元町通り。店店が私には見知らない花のように開いていた。長い旅のあとなので、すっかり疲れきり、すこし熱気さえ帯びていたけれど、それでも私は見せかけだけは元気よくコツコツとステッキを突きながら、人々の跡から一体どんな方角へ行くのかわかりもせず
に歩き続けていた。今夜何処へ泊ったものやらまだ目あてのない旅行者で自分があることに誰からも気づかれまいと思つて……。私はとある珈琲店の中へ気軽そうにはいつて行つた。ただその店の名前が東京で私の行きつけている珈琲店の名前に似ていたばかりに。

私はそこから須磨^{すま}のT君のところへ電話をかけた。T君はすぐ私のいる店へ来ると言つた。そうして私がまだ一杯のオレンジードを飲んでしまわないうちに、そのT君が元気よくはいつて来た。彼はベレ帽をかぶり、なんだか象の皮のような外套^{がいとう}を着込んでいた。

それから私たちは薄ぐらい山手通りを、狭い坂を上つたり下りたりしながら、小さなホテルから小さなホテルへと歩き廻っていた。しかし私の気に入つたホテルはひとつも無かつた。私たちは再び中山手通りへ出た。しかしそのただ広いだけ、かえつて薄ぐらい感じのする電車通りには、ほとんど人影がなかつた。T君が突然立ち止まつた。そうして電車通りの向う側にある一つの赤ちゃけた小ぢんまりした建物を指さした。その家の上の、煤^{すす}けたなりに白白とした看板には、

HOTEL ESSOYAN [# 「HOTEL ESSOYAN」は斜体]

という横文字が、建物と同じような赤ちゃけた色で描かれてある

のが、ぼんやりと読めた。遠くからそれを一目見たきりで、その小さなホテルは私の気に入った。と見ると、その電車通りに面した二階の窓の一つが開かれていて、それが細長い光りを暗い舗道ほどうの上にくつきりと落していた。そしてその窓からは、逆光線を浴びているので、年よりなのか若い女なのか見当のつかない、そして髪の毛だけがきらきらと金色に光っている、一つの女の顔が、そのホテルの方へと電車の線路を横切りつつある私たちの方を窺うかがうようにしていたが、それはちょっと無気味な感じだった。私たちがその窓の下までくると、向うでも私たちを恐れるかのように、その窓は閉されてしまった。

私たちは小さな石段を昇り、そののべルを押した。しかし、いつまでも、誰も出て来そうな気配がしない。そこでT君が再びべルを押したり、ノツブを廻してみたりしている間、私は石段を下りて、もう一度それがホテルであるかどうかを確かめるため、さっきの看板をふり仰いで見た。そうしてその赤ちゃけた横文字をホテル・エソワイアンと読みにくそうに口の中で発音しながら、今度はその大きな横文字の下方に、ずっと小さな字で「TEL.」。「#「TEL.」は斜体」と描かれてあるのまで認めた。しかしその電話番号のあるべき場所は空虚のままだった。そしてそこだけが気のせいか他処より一そう白白と見えるのは、そこに最近まで書かれてあった電話番号がいまは白いペンキで塗りつぶされてあるのかも知れなかった。

やっとのことで表扉が大きく軋きみながら開かれた。そしてその内側には、そのホテルの主人らしい、すこし頭の禿はげかかった、私たちよりも背の低いくらいな毛唐けとつが、ノツブを握ったまま突っ立っていた。T君が英語でもって部屋はあるかと声をかけた。するとその

主人はそれよりもつと下手糞な英語でそれに応じた。(私はへんに重々しげなアクセントによつて彼が露西亞人らしいのを認めた。)

いま自分のところには階下に小さな部屋が一つ空いているきりだ。それも丁度いまその部屋の借り手が東京へクリスマスをしに行つていたので、その間だけなら貸すことが出来る、というような意味のことをT君に言つていらした。そんな部屋の交渉は一切T君に任せたきり、その玄関口に無雑作にほうり出されてある埃まみれの本棚だの、錆びかかったタイプライターだのへ目を注いでいた私は、やつと顔を持ち上げながら、どうせ私も二三日ぐらいしか泊らないつもりだからそれを見せて貰おうじゃないかとT君を促した。T君がそれを主人に通訳してくれた。さつきからT君の方をばかり見ていたその主人は、今度はそのおずおずしたような視線を私の方へ注いで、ではひとつその部屋を見てくれと言いながら、先きに立つて、便所やらコック部屋やら浴室やらの前を通りぬけながら、ずっと奥まった部屋へ。そんな奇妙なところに二つばかり小さな部屋があるのだが、その一つのなかへ私たちを導き入れた。

そんな奥まった小さな部屋へはいると、いきなりT君が仏蘭西の何処とかの田舎で泊つたことのある古い旅籠の部屋にそれがそっくりだと言い出したので、私もそうかなあとと思いながら、そこにある古ぼけた寝台だの、いやに大きな鏡ばりの衣裳戸棚だの、剥げちよろな鏡台だの、小さなナイト・テーブルだのを眺め廻しているうち、それがいかにもそんな外国の片田舎にありそうな旅籠屋のような気がした。そしてこの悲しげな部屋がいまの私の心に不思議なくらい似つかわしいように思えた。

その小さな部屋が朝飯つきで一泊三円だという。そこで私はとも

かくも十円札を一枚だけ渡しておいた。そうすると、その時までともすると、小さなトランクひとつ持っていない私たちを妙に不安そうな眼つきで見がちだった、すこし頭の禿げたその主人は急にそわそわし出したように見えるくらい愛想よくなつて、私の方を向きながら、それではお前もこちらにクリスマスを送りに来たのかなどと問い出した。私はまた私で、やがてその主人のかかえてきた大きな宿帳に、露西亞人や波蘭人らしい名前ばかりの並んでいる下へ自分の名前をぶきつちよな羅馬字で書きつけているうちに、クリスマスなんかを一向楽しいとも思ったことのない私であつたが、なんだか不意に、明日からのクリスマスを楽しく送りに、わざわざこんな神戸くんだりまでやって来たかのような気にさえなり出したほどであつた。……

Ｔ君が明日また正午頃来るからと約束して帰つてしまうと、私は今朝から汽車に乗りどおしだったので、さすがに疲れていたし、どうやら熱もすこしあるらしいので、すぐ服をぬいで、シャツだけになつて、寝台に横になつた。それでもその部屋は小さいだけ、ステイムで蒸し暑いくらいだった。が、さて横になつてみると、私はこんな慣れない部屋の中ではなかなか寝つかれそうもなかった。あいにく読む本は一冊も持っていない。その時私は、つい今しがたこの部屋を片づけに来たホテルの主婦らしい女が、鏡台の抽出しから腕いっぱい書類を取り出して、それを他の部屋へ移そうとするのを見て、それはそのままにして置いてもいいと言ったら、それを又元のところへ入れ直して行つたのをひよつくり思い出した。私はベッドから起きて行つた。そうしてその抽出しに手をかけようとした時、ちよつと気がとがめたが、どうせこんなところへ入れつ放しにして

置くほどのものなら大事なものではあるまいと思ひ直して、それを構わずに開けてみた。抽出しの中はなんだか私の読めない露西亞語の本ばかり詰まっていたが、なかに一冊一独乙語ドイッの薄っぺらな本の雑っているのを見つけた。それから小さな独露辞書らしいものもあった。その薄っぺらな本を手にとって見ると、モスコオで発行されたハイネの小さな詩集であった。これやあいいものがあつたと、私はそれを手にしたまま、再びベッドにもぐり込んだ。ぱらぱらと頁ページをめくってみると、或る頁に名刺ぐらいの大きさの写真が一枚――「#「挿」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第⁴水準第⁴水準第⁴水準であつた。雀斑そばかすのありそうな、若い男の写真である。この露西亞人らしい男が、この部屋の借り手で、そしてこのハイネの詩集を読んでいるのかと思つたら、ちょっと懐なつかしい気がした。私はそれを注意深くもとの頁に「#「挿」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第⁴水準²⁻¹³⁻²⁸」んで、それからこんどはその巻頭にある「五月に」(Im Mai)「#「Im Mai」は斜体」という詩を、一字一字丁寧に見つめながら読んでいった。

「#ここから3字下げ」

【Die Freunde, die ich gekusst und geliebt,】

【Die haben das Schlimmste an mir verurteilt.】

Mein Herz bricht 【#ここまでの3行は斜体】

「#ここで字下げ終わり」

しかし独乙語はなにしろ高等学校でちょっと習ったきりなので、その詩のなかの太陽「#「太陽」に傍点」だとか薔薇「#「薔薇」に傍点」だとか心臓「#「心臓」に傍点」だとか五月の空「#「五月の空」に傍点」だとか、そんな簡単な名詞ぐらいは覚えてい

たけれど、**肝腎**な形容詞や動詞をすっかり**胸**忘れてしまっているの
で、私は自分の空想力でやっとそれを補いながら読んでみたのであ
るが、どうもそんな私に分かる語彙ごいだけから見ると、その詩はおよ
そ私の現在の気持からはあまりに懸かけ離れていそうに思えたので私
はその詩の意味をちつとも**嘸**み込めないうちに、その小さな本を私
の枕まくらもとに伏せてしまった。それに私はいい具合にすこしうとうと
しだしたものだから……

正午ごろ、T君が私を誘いに来てくれた。それから二人でホテル
を出ると、一時間ばかり古本屋だの古道具店だのをひやかしたのち、
海岸通りのヴェルネ・クラブに行った。しゃれた仏蘭西料理店だ。

そこの客は大概外国人ばかりだった。私たちが一隅の卓で殻かつきの
牡蠣かきを食っていると、兎うさぎの耳のようにケーブの襟えりを立てた、美しい、
小柄な、仏蘭西女らしいのが店先きにつと現われて、ポオイをつか
まえ、大事そうに両手でかかえている風呂敷包を示しながら、何や
ら片言まじりの日本語で喋しゃべ舌つっている。私には「ネーブルをもって
きました」と言ったようにそれが聞えた。ポオイはなんだか解わからな
いような顔をして奥へ引つ込んでいったが、それと入れちがいにそ
の料理店の主人らしいのが出て来て、仏蘭西語で愛想よく一人一人
に挨拶あいさつをしながら客たちの間を通り抜けて、その婦人の方へ近よつ
て行った。その時その婦人が風呂敷包を開けながら、ヴェルネ氏に
渡したものをちらつと見ると、それは一匹の可愛らしい三毛猫であ
った。ネコといったのを私はネーブルと聞きまちがえたのであった。
ヴェルネ氏はそれをにこにこして受取りながら、しきりに「Tre、

s bien i Tre's bien i】【#【Tre's bien i Tre's bien i】」

は斜体」と繰り返している。おしまいには婦人までが鸚鵡がえしに「Tre's bien ?」【#「Tre's bien ?」は斜体】と二度ばかり口ごもる。低くはあるが、いかにも満足したような声である。

私たちはそれからマカロニや何やらを食べて、その店を出た。そうして私たちはすぐ近くの波止場の方へ足を向けた。あいにく曇っていていかにも寒い。海の色はなんだかどす黴くさえあった。おまけに私がそいつの出帆に立会いたいと思っていた歐洲航路の郵船は、もうこんな年の暮になつては一艘も出帆しないことがわかった。私の失望は甚だしかつた。そうしてただ小さな蒸汽船だけが石油くさい波を立てながら右往左往しているきりだつた。ときどき私たちとすれちがつて行く仏蘭西の水兵たちの帽子の上に、ポンポン・ルウジユが、まるで嬉しがっている心臓のように、ぴよんぴよん跳ねていたが、それが私の沈んだ心臓と良い対照をした。海岸通りの何とかいう薬屋のシヨオウインドを覗いたら、パイプやなんかと一緒に五六冊、英吉利語の本が陳列されてあつた。そのなかにふと海豚叢書の「プルウスト」を見つけたので、ゆうべの読みづらかつたハインの詩集を思い出しながら、その薬屋のなかへ這入つてその小さな本を買つた。T君の話では、この店にはときどき随筆物で面白い本が来るのだそうだ。それからまた、私たちはその窓から電話やタイプライタアの強請つたり吃つたりする音の聞えてくる商館の間を何となくぶらぶらしてみたり、今では魚屋や八百屋ばかりになつた狭苦しい南京町を肩をすり合せるようにして通り抜けたりしたのち、今度はひっそりした殆ど人気のない東亜通りを、東亜ホテルの方へ爪先きあがりによつた。その静かな通りには骨董店だの婦人洋服店だのが軒なみに並んでいる。ヒル・ファルマシイだとか、エレガン

トだとか云う店は毎年軽井沢に出張しているので私には懐しく、ちよつとその前を素通りしかねた。とあるネクタイ屋のシヨオウインドに洒落れたネクタイが飾つてあるので近づいて行つて、覗こうとしたら、何処からか犬が私たちに吠えついた。あたりを見廻しても、犬なんかいないのだ。やつと気がついて頭を持ち上げて見ると、そのネクタイ屋の二階には看板の代りに、このへんの大概の洋館のようにバルコンがついていて、その緑色の亜字欄に精悍そうなシエパアドが一匹縛りつけられていたが、そいつが私たちに吠えているのであつた。ネクタイ屋の看板にしては、これはすこし物騒すぎる。聖公教会の門のところに、まるで葡萄の房みたいに一塊りに、乞食どもがかたまっている。私たちがそれを不思議そうに見過ぎしながら、それからすこし急な坂を上つてゆくと、今度は一軒の立派な花屋の前に、何台も何台も、綺麗な自動車ばかりがかたまっている。

その時やつと教会と乞食と花とが私の頭のなかで唐草模様のように絡み合つて、私に、今夜がクリスマス・イヴであることを思い出させた。……私はそこでT君の方へふりかえりながら言つた。

「これから外人墓地へでも行つてみようか？」

「うん 君さえ元気があれば行つてもいいよ……」

「そうだなあ……」

……自分で言い出しておいて、私はちよつと首をかしげる。そんな会話を交しながら、いつの間にか私たちの歩いていく山手のこのへんの異人屋敷はどれもこれも古色を帯びていて、なかなか情緒がある。大概の家の壁が草色に塗られ、それがほとんど一様に褪めかかっている。そうしてどれもこれもお揃いの鎧扉が、或いはなかば開かれ、或いは閉されている。多くの庭園には、大粒な黄いろい果

実を簇むらがらせた柑橘類かんきつるいや紅い花をつけた山茶花さざんかなどが植わっていたが、それらが曇った空と、草いろの鎧扉と、不思議によく調和していて、言いようもなく美しいのだ。……T君もひさしぶりにこの辺まで上って来たものらしく、さつきからしきりに此処こゝいらまでよく遊びに来たことのある昔のことを思い出してはひとりで懐なつかしがっている。私は私で、こんなユトリ口好みの風景のうちに新鮮な喜びを見出みいだしている。こんな家に自分もこのまま半年ばかり落着いて暮らしてみたいもんだなあと空想したり、こういうところでその幼時を過したT君のことを羨やうましがったりしながら、だんだん狭くなってくる坂を上ったり下りたりしているうちに、今度はT君の方が首をかしげだした。どうやら彼自身のこんがらがった幼時の思い出をほごすのにあんまり夢中になり過ぎていたT君は、いつの間にやら、私たちの目指ねざしている外人墓地への方角を間違えてしまっているらしかつた。その拳句あけくに漸せうつと彼は、私たちが飛んでもない見当ちがいな、或る丘の頂きの上って来てしまったことを、氣まり悪そうに私に白状した。そうして私たちの上って来たやや険しい道は、一軒の古い大きな風変りな異人屋敷　その一端に六角形の望楼のようなものが唐突とうとつな感じでくつついている、そして棕相しゅろだのオリーブだのの珍奇な植物がシンメトリックな構図で植わっている美しい庭園をもった、一つの洋館の前で、行きづまりになっていた。そうして少しがっかりして、息をはずませながら、その風変りな家に見とれている私たちの姿を目ざとく認めると、黄色に塗られた鉄柵てつさくごしに、その庭園の中から一匹のシェパードが又しても私たちに吠ほえ出した。私はあんまり犬が好きじゃないのだ。どうもこの辺もいいけれど、もの静かに散歩をするには、すこしシェパードが多過ぎるようだ。

夕方、私たちは下町のユウハイムという古びた独乙菓子屋トイッの、奥まった大きなストーブに体を温めながら、ほっと一息ついていた。其処そこには私たちの他に、もう一組、片隅かたすみの長椅子に独乙人らしい一對の男女が並んで凭りよかかりながら、そうしてときどきお互の顔をしげしげと見合いながら、無言のまんま菓子を突っついていきりだった。その店の奥がこんなにもひっそりとしているのに引きかえ、店先きは、入れ代り立ち代りせわしそうに這入はいってきては、どっさり菓子を買って、それから再びせわしそうに出てゆく、大部分は外人の客たちで、目まぐるしいくらいであった。それも大抵五円とか十円とかいう金額らしいので、私は少しばかり呆気あっけにとられてその光景を見ていた。それほど、私はともすると今夜がクリスマス・イヴであることを忘れがちだったのだ。

私はなんだかこのまんま、いつまでも、じっとストーブに温まっていたかった。しかし私は旅行者である。何もしないで、こうしてじっとしていることも、後悔なしには、出来ないのである。

やがて若い独乙夫婦は、めいめい大きな包をかかえながら、この店を出て行った。JUCHEIM「# JUCHEIM」は斜体きんぱくと金箔で横文字の描いてある硝子戸ガラスドを押しあけて、五六段ある石段を下りて行きながら、男がさあと蝙蝠傘こうもりがさをひらくのが見えた。私は一瞬間、そこには雪でも降りだしているのではないかしらと思った。ここにこうしてぼんやりストーブに温まっていると、いかにもそんな感じがして来てならなかったが、静かに降りだしているのは霧のような雨らしかった。

その夜十二時近くに、私はすっかり雨に濡れ、力なげな咳さえしながら、午前中に出たきりのホテル・エソワイアンに帰って来てみると、その中はひっそりかんとして、誰もまだ帰ってきていないのか、それとももうみんな寝てしまったのか、分らないくらいだった。薄ぐらい廊下にただ一匹、からす猫がうろうろしていた。私はふとヴェルネ・クラブでちらっと見た美しい婦人の抱いていた仔猫のことを思い出し（どうしてだか、それがずっと数日前のような気もしたが）、そのきたならしい猫をそっと抱き上げて、咽喉のところを撫でてやったら、すぐにそいつが咽喉をごろごろ鳴らし出したので、私はなんだか反ってさびしい気がした。床におろしてやると、私の足へ身をすりよせるようにして、ついてくるのだ。すこし邪魔っけになって、私はその猫を足で向うへ押しやりながら、自分の部屋にはいろうとしてそのノブに手をかけた拍子に、ひよいと薄ぐらい廊下の突きあたりを見すかすと、其処に、二階への階段へちよつと片足をかけたまま、ぼんやりした人影がこちらへ顔を向けながら突っ立っているのに気がついた。それは女にはちがいないが、その顔は電燈の片光りを浴びて、へんに無気味な凸凹をつくっているので、それが少女の顔なのか年よりの顔なのか私にはどうしても識別できなかった。私はふと最初の晩、ホテルの窓から顔を出していた女のことを思い出した。その時と同じように、その髪の毛だけきらきらと金色に光っていたが、その髪の恰好は今朝私が食堂で見かけた青衣の少女のそれとそっくりだった。……私はなんだかぞつとしたような気持になって、急いで部屋にはいるなり、ドアをぴたんと閉めてしまった。それをうるさい猫のせいにして。……それから私が着物やぬいでいる間中、その猫はそのドアを外から爪でがりがり掻

ていたが、私がベッドに横になった時分は、もうあきらめたのか、その爪の音はしなくなった。とても疲れていて、さつきまでは眠くつていまにも倒れそうであったのに、さて電燈を消してしまつと、よくあるやつだが、急に目が冴え冴えとしてきた。そこでしようことなし、再び電燈をつけ、今日買ってきたばかりの「プルウスト」を出鱈目に披きながら読み出した。そうしてひょっくり読みあてたのが、こんな一節であつた。

ノルマンディ海岸のバルベックに少年がはじめてお祖母さんばあと一しよに到着した晩のことである。彼一等はグラント・ホテルに泊る。彼は自分の部屋にはいる。長い旅のあとなので、すこし熱気を帯び、ぐったりと疲れて。しかし眠ることは、こんな見慣れぬ家具類のなかでは、とても出来そうもない。習慣が、時計の音を黙らせたり、董色すみれいろのカーテンの敵意を弱めたり、家具を動かしたりする余裕がないのだ。こんな気味の悪い部屋のなかに、と云うよりも、まるで野獣の洞窟どうくつのような中に、たった一人きりで、四方八方から異形いぎようのものに取り囲まれているよりか、むしろ死んでしまいたい少年は思う。お祖母さんがはいつて来て、彼をなぐさめ、彼が靴のボタンをはずすの手つだい、着物をぬがせ、彼をベッドに入れてくれ、そしてそこを立ち去る前に、もし夜中に何か彼女にして貰もらいたいことがあつたら、彼の部屋と彼女の部屋との間の仕切りをノックするようにといい残して行く。彼がノックをすると、お祖母さんはすぐ来てくれる。しかしその夜をはじめ、それから幾夜となく、彼は苦しむ。彼は愛人のジルベルトなしに何時いつまでも生きなければならぬのではないかという考えや、彼の両親を永久に失うのではないかという考えや、彼自身の死の考えに恐怖しだす。しかし

そういうような愛人や両親や自分自身から離れている不安は、その不安に慣れるにしたがつて、彼自身もだんだん平気になって行くのではないかと考えはじめた刹那、それは一層大きな恐怖に変わる。何故なら、習慣の錬金術がこうして苦しんでいるものを完全な無關心者（その者にはそんな苦しみの原因が全く莫迦げたものに思われるのだ）に変えてしまい、そうしてその時こそ彼の愛情の対象が消えるのみならず、その愛情そのものさえ消えてしまいかも知れないからだ……

ふとそんな一節を読みあてた頁から私は目をそらして、私にはまだ慣れきっていない自分の部屋を眺めまわしたのち、それから目をつぶって、今朝のちよつと無気味だった眼覚めを心のうちにまざまざと蘇らせた。……

翌朝、私が目をさましたのは昨日よりもまたずっと遅いらしかつた。例の支那人のボオイを呼んで、朝飯はまだ食わせてくれるかと聞いたら、すこし怒つたような顔つきをして、朝食を食べるならもう少し早く起きてほしい、もう十二時だ、と下手糞な日本語で、それだけ一層そう見えるのかも知れないが、私にかなり突慳貪な返事をした。が、私が食堂の中へはいつて見るとそこにはまだ昨日と同じように三人の女が遅い朝飯に向つていた。私の隣りのテエブルの母娘づれらしい方は、ふたりとも昨日と同じの黒い衣服をつけて、若い女の方は相変わらず綺麗に化粧をしていたが、もう一方の、私スキのうは十八九の少女だとばかり思い込んでいた金髪の娘の方は、今朝は光線の具合でか、まるで顔が皺だらけで、三十をこしていそうに思えるくらいに老けて見えた。私はおとついの窓の女も、ゆう

べ廊下で出会った少女なのか年よりなのかわからない女も、ひよつとしたらこの女だったのかも知れないぞと思った。おまけに今朝は寝間着らしいものの上にけばけばしい緑色のガウンをだらしなく引っかけたまま、トオストを齧りながら、栗色の髪の若い女が何やらもの静かに話しかける度毎に、荒あらしくそちらへ体をねじ曲げては無雑作に答えるかと思うと、そのついでに私の方をも無遠慮に見つめたりした。私はなんだかいやな気がして、その女から眼をそらしながら、ふとその眼を私がときどきふんづける小さな軟かなものの方へ持つて行くと、それが三鞭酒の栓らしいことを認めた。ははあ、ゆうべは此処でも三鞭酒を抜いたんだな？……こいつらが騒いだのかしら？ それにしてもこいつらは一体何者だろう、私にはとんと得体が知れない。……と、そんなことを考えながら、私が靴でその小さな栓を踏みにじっていると、食堂のドアを開けてのっそりと、まだこのホテルで私の見かけたことのない、何処やらちよつとクライブ・ブルックめいた中年の紳士が、寝ぼけたような顔をして、這入って来た。そうしてなんだか寒そうに手を揉みながら、女たちに何か私にはわからない冗談を言っているらしかったが、そこへ丁度、ボオイが、私のためにポリッジを運んできたので、そいつをつかまえて、「朝飯出来ますか？」ときごちない英語で聞いていた。支那人のボオイはますます仏頂面をしまして、その男のために中央の円卓子の上を不機嫌そうに片づけ始めた。それを見ると私はなんだか急に微笑がしたくなくなった。そうして私のテーブルに砂糖がないことに気がついて、それをボオイに言おうと思っていた私は、ついその男の方に気をとられて、それを言いそびれていた。……そのうちにどうしてだか突然、私には、この食堂の隅々にまで漂っていそ

うな、陰惨というほどのものではないけれど、何かしら重苦しい、
澱んだ空気が呼吸苦しく覚えられた。そしてそれをあたかも具
体化したように、私の咽喉はへんにえがらっぽくなり出した。どう
もすこし扁桃腺をやられたらしい。そうして砂糖なしのポリッジは
大へん不味かった。

私はこのホテル・エソワイアンには、四日ばかり泊った。三日目
ごろからますますこのホテルの中の噎ぶような重い空気が私には我
慢しきれなくなった。何ということなしに世間の空気が息苦しくな
ったあまりに、その息ぬきにわざとこんな世間から離れたようなホ
テルを選んで泊ったのであるけれど、このホテルの中のそういう空
気は私を—そう窒息させそうにした。私はもつと新鮮な、そして気
持のいい空気がほしくなった。私はとうとう須磨の方へ宿を替える
ことにした。

そうして私がこのホテルを立ち去ろうとする前に、最後に私の経
験したいかにもこのホテルらしい異様なことは、一泊三円という約
束だった宿泊料が四晩泊って十一円であったこと、それは何も特別
に一円負けてくれたのではなしに、あの頭のすこし禿げかかったお
人好らしい主人が熱心に首をかしげて暗算した合計であったので、
私は例の気まぐれから大いに愉快になり、すましてその通りに勘定
を支払い、そしてそれだけ余分に私にはかなり無愛想だった支那人
のポオイにチップを置いて来てやったことだった。どうも気まぐれ
というものは多少メフィステイクなものであるらしい。

その一週間ばかりの小さな旅行の後、私はすっかり扁桃腺をこじ

らせて、八度近い熱を出しながら、東京へ帰って来た。そうしてそれなり寝ついてしまった私は、或る日、ふと手許てもとにあったレクラム版のハイネの詩集をめくっているうち、ホテル・エソワイアンに泊った最初の晩、なかば眠りに浸っていた眼をいたずらにその文字面にさまよわせていたところの「五月に」という詩をひよつくり読みあてたので、今度は一字一字、小さな独和辞書を引っぱりながら読んでみたら、そのときは半分以上も字の意味が分らないままに自分勝手にそれをハイネ好みの甘美な詩に仕上げてしまっていた奴やつが実はハイネの晩年の、彼の愛していた友人たちからひどい仕打ちをされ、心臓の破れるような思いをしていた頃の、ひどく絶望的な詩であることを知って、私は愕然がくぜんとした。その詩の最後の一聯いちれんのときは、

「#ここから三字字下げ」

しかしここでは太陽と薔薇ばらとが

なんと残酷に私を突き刺すことよ！

そうして五月の青い空は私を嘲あざわらっている。

おお美しい世界よ、お前は本当に厭いとわしい！

「#ここで字下げ終わり」

というような意味でさえあるのだ。つまり、私の忘れていた独乙語のほとんどすべてが呪詛じゅその文字だったのである。そして私がそれらの不可解な文字の上にながいこと眼をさまよわせているうちに、それが解らないなりにそのとき私の気持からはあまりに懸かけ離はなれて

いるもののように私に思いなされたところのその詩は、実はそのときの私自身の気持さながらであったのだ。

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「新潮」

1933（昭和8）年9月号

初収単行本：「物語の女」山本書店

1934（昭和9）年9月1日

初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年

5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。